

〈地域コラム〉

子どもたちの“伝えたい”思いを育む保育を考える ～「絵の手紙」の活動を通して～

認定こども園 かいけ心正こども園

1 研究の概要

<1>本園の概要

法人創立50周年を迎えた本園は、鳥取県西部にある皆生温泉の西側、日本海が間近に見える自然に囲まれた環境にある。平成23年4月には既存の「かいけ幼稚園」の隣に「認可保育所 かいけすまいる保育園」を併設し、鳥取県西部地区初の幼保連携型認定こども園の認可を受け、幼保一体化施設として新たにスタートした。その後、「子ども子育て支援新制度」の施行に伴い、平成27年4月より幼児教育と保育を一体的に行う新たな幼保連携型認定こども園へ移行したことで「かいけ心正こども園」と園名も変更し、地域の子育て支援センターの役割も担いながら、0歳から就学前までの子どもたちへつながりのある保育を心がけている。

<2>研究の概要

本園では、開園当初より子どもたちの表現教育の一つとして「造形活動」に積極的に取り組んでおり、その活動は本園の特色の一つに位置付けている。「造形活動」では、全身を使って気持ちを解放する感触遊びや色遊び、様々な素材や用具を使った製作活動、心の内にあるものを伝える描画活動など様々行っているが、その中で今回は「絵の手紙」の活動の研究について紹介したい。

「絵の手紙」との出会いは、以前に職員が他園を見学した際に知ったのだが、これは子どもたちの心の中にある“伝えたい”思いを表現するのにふさわしい活動のひとつとなるだろうとの意見が出、職員間で話し合いを行い、平成20年より園全体で導入することにした。

これまで活動を続けてきた中で、少しずつ自分なりの思いを絵で伝えようとすることを楽しむ子どもの姿が見られるようになってきた。しかし、活動に消極的な子どもも見られるため、環境構成や題材、保育教諭の関わり方など課題もあるのではないかとと思われる。そこで“子ども”と“保育教諭”の両者の視点から「絵の手紙」の活動を通して、子どもたちの“伝えたい”思いを育む保育について考えようと、平成27年度・28年度に研究と実践を行ってきた。

<3>平成27年度の取り組み

(1) これまでの取り組みと考え方

「絵の手紙」の活動では、子どもたちが身近な発見を気軽に描けるような小さな紙(A5サイズ)を準備し、思いついたことを自由に描いたり、また、何を描こうか子どもがイメージをもつきっかけとなるような問いかけとして「大好きな人は?」「お休みの日に何していたの?」などを学年別に設定するなどして、園独自の活動方法を加えながら活動を行ってきた。描いた絵は、個人別ファイルにとじて年度末に持ち帰っている。

「絵の手紙」の活動を行うことで、「どうしたら自分の気持ちが伝わるのかな?」と子どもなりにコミュニケーションについて考えるきっかけとなることで、子どもたちの“伝えたい”思いが育ち、自分の伝えたいこと、思いや願いを意欲的に相手に伝えることが出来るようになってほしいと考えている。

特に年長児は、2歳児の頃から「絵の手紙」に取り組んでいる子がおり、描いた絵を保育教諭に見てもらえる喜び、日常の中から伝えたいことを見つけた経験も多く積んでいる。そのため、今までの経験の積み重ねに

より、保育教諭のシンプルな声かけですぐに描き出す姿や、時間をかけじっくりと取り組む姿が見られる。一方で、活動を繰り返し続けていく中で、描くことに満足してしまい、保育教諭との言葉のやりとりが十分にできていない子どももいるように感じている。そこで、絵を通して子どもたちとコミュニケーションをもっと取りたい、絵から子どもたちの表現や思いを深く知り、一人ひとりの理解につなげていきたいという保育教諭たちの強い思いが芽生えてきた。これらのことを踏まえて、子どもたちの絵の手紙ファイルを見返してみると、いくつかの特徴的な姿が見られた。

- ・題材によって色の使い方や人物の描き方が異なる子
- ・描く際に前後や横にいる子と同じような絵を描く子
- ・毎回同じような絵を描く子

これらは、もしかすると私たちの関わり方や視点を工夫することで子どもたちへの今までとは違った考え方や育ちが見えてくるのではないかと、もっと他の何かに気付くことができるのではないかと考えた。そこで今回は「毎回同じような絵を描く」という子どもの姿に注目してみた。

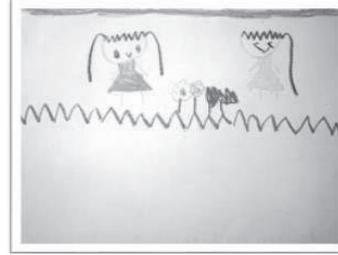
(2) 【事例】毎回同じような絵を描く子 ～「お母さんとお散歩している」～

「お母さんとお散歩している」という絵を毎回見せてくれる D 児の絵の手紙ファイルを見返すと、次のような事柄に気づくことができた。そして、そのことをふまえて保育教諭の関わり方を変えていった。

- ・毎回「お母さん」という描く人物は同じでも、そのつど服装や周りの風景が異なっている。
- ・保育教諭は、絵の中の小さな変化について細かく声かけすることを意識し「お母さんが大好き」という思いがいっぱいの子の作品をしっかりと認めるようにしたところ、D 児はとても嬉しそうな様子を見せた。
- ・その上で、今までの作品と一緒に振り返りながら、「この絵は虹が出ているね。」「こんなお花、見たことない。かわいい形や色だね。」と絵の中の D 児なりの工夫を具体的に認めていくようにした。
- ・保育教諭には、D 児が一見すると同じような絵を描いているように見えていたので「何を描こうかと迷っているのかな?」と思いこんでしまっていたが、D 児は大好きなお母さんを毎回どのように表現したいかをイメージしながら工夫して描いているのではないかとという別の見方もできるのではないかとすることに気付くことができた。

※年長児 A 子の絵の手紙①②③ テーマは同じだが、描く月によって周りの様子に変化している

①お母さんとお散歩している (5月) ②お母さんとお散歩している (7月) ③お母さんとお散歩している (10月)



(3) 平成 28 年度に向けての課題

平成 27 年度の「絵の手紙」の活動は、主に保育教諭と子どものコミュニケーションを図るツールとなっていたといえる。今後は園内だけの活動にするのではなく、他にも伝えたいと思える相手を増やしていきたいと思う。平成 27 年度に 1 度だけ子育て支援の一環として土曜日の希望登園日に親子で「絵の手紙」に取り組んだことがあった。その際に、子どもたちの描く様子を見たり、じっくりと話を聞いたりする保護者の姿が印象的であった。そこで、平成 28 年度は、園で描いた「絵の手紙」を家庭に持ち帰った際に、保護者との対話を

楽しめるように保護者を巻き込んだ活動を行っていきたいと考えた。

<4>平成28年度の取り組み

(1) 取り組みと実践例

前年度の課題をもとに、「絵の手紙」の活動を家庭へ繋げていくことで、子どもたちの“伝えたい”思いがさらに広がっていくのではないかと考え実践を行った。

(2) 【実践Ⅰ】1枚の「絵の手紙」を通して親子でやり取りを楽しもう

まず始めに、保護者にも絵を通して子どもとじっくり会話をする体験をしてもらおうと、子どもがその日に描いた「絵の手紙」1枚を家に持ち帰り、そして「これは何？」と普段保育教諭と話しているようなやり取りを家庭で保護者にもやってもらい、アンケートを実施した。【表1 保護者へのアンケート結果①参照】

アンケートの回答には、子どもたちの思いを受け止め、絵を通して会話を楽しんだことが伝わってくるような内容の他に、子どもの技術的な面を重視する内容もあった。

内容	①やりとりをしている時の子どもの様子はどうでしたか	②やりとりをした時に感じたことは
保護者の主な感想	<ul style="list-style-type: none"> ・嬉しそうに話してくれた ・恥ずかしそうにゆっくり話してくれた ・なかなか話してくれなかった ・何を描いたのか忘れていたようだった 	<ul style="list-style-type: none"> ・想像力や表現力が豊かになった ・子どもの描く絵には意味があるのだと知った ・子どもの発想は面白く、親も楽しんで見る・話すことが出来た ・絵を通して子どものことを褒めることが出来た ・子どもの成長を感じられた ・画面いっぱい描けるようになった ・年少・年中の時に比べ、絵が上達した ・見ただけで何が描いてあるのか分かる絵になった

【表1 保護者へのアンケート結果①】

(3) 【実践Ⅱ】親子で「絵の手紙」の活動を体験しよう

次に、保護者は実際、どのように「絵の手紙」を通して子どもたちと関わっているのかを知るため、親子で「絵の手紙」の活動に取り組んでみることにした。

本園では、在園児向けに、子育て支援の一環として毎月第3土曜日に“親子ではっぴーデー”という希望者参加型の親子体験活動を行っている。今回(6月)は“造形遊び”をテーマに、3つの活動の一つとして「絵の手紙」の活動を様々な年齢の子どもと保護者が自由に参加できるように設定した。

子どもが「絵の手紙」を描いている時の親子の様子は、子どもが絵を描く姿を保護者がしっかりと見守りながら「どんな絵が完成するか楽しみだなあ〜。」と期待を膨らませていたり、子どもが、「お母さん、一緒に描こうよ。」と誘って、一緒にお絵描きを楽しんでいた。なかなか描き出せない子には、「ママを描いてよ。」と保護者がリクエストする姿も見られた。また、完成した絵について会話をしている様子は、子どもが話す言葉を保護者が絵の裏面に一つひとつメモしたり、「上手だねえ。」と褒めていたりしていた。

また、作品を持ち帰って家族に見せることを楽しみにしている姿も見られた。完成した作品を見ることが多い保護者にとって、製作過程をじっくりと見ることは新鮮なようで、子どもたちの頑張りや工夫している姿を

しっかりと褒めていた。その反面、「上手だねえ。」の声掛けで会話が続かない親子もあった。

④親子で「絵の手紙」の活動を体験しよう

～親子ではっぴーデーの様子（6月）～



(4)【実践Ⅲ】1学期分の「絵の手紙」ファイルを持ち帰り親子でやり取りを楽しもう

前述のアンケートの中で「昨年度に比べて…成長した」というような内容が多く書かれているのは、学年末にファイルを持ち帰っているために、ほぼ1年間の作品をまとめて見ることになってしまい、年単位で子どもの成長を感じてしまうこと、また、子どもにとっても、保護者が「何を描いたの？」と問いかけても、1年前の作品では「忘れた…」と言ってしまうのも仕方ないことではないかと感じた。

そこで、子どもたちの記憶や感じた思いが鮮明なうちに、親子でたくさん会話を楽しんでほしいと思い、1学期分の「絵の手紙」ファイルを持ち帰り、親子で絵を見ながらコミュニケーションをとり、その時の様子や感じたことを前回同様にアンケートに答えてもらった。【表2 保護者へのアンケート結果②参照】

アンケートからは、思いを伝えることが出来た子、なかなか難しかった子などがそれぞれあったように感じられた。また、子どもたちそれぞれの思いや表現を知り、親子でのやりとりを楽しんでいるような回答のほかに、子どもたちの技術的な面に注目する回答もあった。

内容	①やりとりをしている時の子どもの様子はどうか	②やりとりをした時に感じたことは
保護者の主な感想	<ul style="list-style-type: none"> ・1枚ずつ何を描いたのか丁寧に教えてくれた ・楽しそうに、恥ずかしそうに話してくれた ・話しているうちに、どんどんストーリーが展開していった ・得意気に話してくれた ・なかなか話してくれなかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・4月に描いた絵のことをしっかり話してくれて、子どもの記憶力に驚いた ・子どもと園での様子について話すきっかけになった ・子どもなりの発想やこだわりを知ることが出来た ・親にとっては一見同じような絵でも子どもにとっては1つずつ違ったイメージを持って描いている ・進級して3か月で自分の描きたいものをイメージして表現できるようになっていた ・絵が上手に描けているのが見られて楽しかった ・絵のレベルが上がった ・1か月に1枚の絵の手紙は少ないのでは…？ ・色をたくさん使って描いてほしい ・想像画などテーマのある絵を描いて子どもの発想を広げてほしい

【表2 保護者へのアンケート結果②】

「絵の手紙ファイル」を持ち帰った翌日には、「昨日お話したよ!」「いいなあ、私はまだ話してないよ〜!」などと、満足そうな様子や話を聞いてもらうことに期待を持っている様子が伺われた。

アンケートを見返してみると、子どもたちが嬉しそうに照れながらも話をした様子や、保護者も年単位の成長ではなく、毎月・毎回ごと子どもたちの思いや成長を感じているように思った。また保護者の一部からは、“あんなふうに上手に描いてほしい”というような子どもの絵に対する要望もあり、子どもたちの絵に対する“保護者の思いや願い”の強さを感じた。

<5>まとめ ～考察と今後の課題～

平成27年度と28年度の取り組みから、子どもたちの“伝えたい”思いを育む保育において、大切なことや必要なことについて考えた。

- ・今回の研究を通して、保育教諭自身に子どもの作品に対する思い込みや、疑問、願いがあったことに改めて気付くことが出来た。そのような考え方を変えていくことで、一見見逃してしまいそうな子どもの作品に対する“本当の思い”や表現の仕方について気付くことが出来たことから、保育教諭の子ども作品の見方・とらえ方について、もう一度見直すことが必要なのではないかと思う。そして、個別に丁寧にかかわりをもっていくことで子どもたちの作品に対する見方も変わり、子どもたちのそれぞれの思いを引き出せるようになったと感じた。また、会話も保育教諭が一方的に話すのではなく、子どもたちなりの言葉で伝えてくれる姿が見られるようになり、引き続き園内研修等で活動を振り返りながら研究を進めていきたい。
- ・子どもたちの思いはそれぞれ異なっていて、保育教諭の問いかけにすぐに反応して会話が広がる子もいれば、以前の作品を振り返ることで会話を楽しめる子など様々であるため「上手に描けたね。」「素敵な絵だね。」などとただ褒めるだけではなく、その子なりの表現を具体的に言葉にして伝えることで、子どもも保育教諭が自分を理解してくれている事がわかり、自分を認めてくれる喜びや安心感を得られるのではないかと感じた。具体的に、何がどのように上手なのか伝えたり、どんなところを工夫したり頑張ったのか問いかけたりすることで、子どもたちの“伝えたい”思いが高まり、保育教諭との関係も深まっていくと思う。子どもの絵を知るのではなく、絵を通して子どもの思いや願い、しいてはその子自身を知ろうとする保育教諭の姿勢が、子ども理解へと繋がっていくのではないかと考える。
- ・日常生活の中から題材を選ぶことで、子どもたちが描きたいものを描き出すきっかけとなり、そのことが“伝えたい”思いが育つことに繋がると感じる事ができた。
- ・年少、年中、年長とそれぞれの学年で目指したい子どもの姿をもち、保育教諭間で活動後に話し合うことで、色々なエピソードや学年・クラスでの様子などを共通理解することができ、子どもたちの“伝えたい”思いを育む保育についてつながりをもって取り組むことが出来た。
- ・周りの保育教諭と相談しながら活動を振り返り見直していくことで、様々なことに気付いたり疑問に向かったりすることが出来た。今後も、周りと連携を取り、広い視野を持って活動していきたいと考えている。
- ・子どもたちの作品を通して会話を楽しむ活動を園内だけの取り組みではなく、家庭や子どもを取り巻く環境へと繋げていくことで、子どもたちがいつでもどこでも、物怖じすることなくのびのびと思ったことや感じたことを伝えてくれるようになるのではないかと考える。
- ・保護者へは、作品展や講演会などを通して子どもたちの作品の捉え方について知らせてきたものの、保護者側の子どもへ対する「こうなってほしい」という願いが強いことをアンケートや活動の様子から感じた。今後、保護者に子どもの表現のどんなところに成長を感じたのか、どんな思いで子どもは絵を描いたのかなどということを「上手」だけでなく、個別に、そして具体的な言葉で知らせる大切さを園の思いとして伝えていきたい。

- ・保護者アンケートの中には「話を聞く余裕がない。」「なかなか話してくれなかった。」などの回答があったことから、コミュニケーションツールとしての「絵の手紙」の活動の趣旨が保護者に十分伝わっていないように感じられた。今後も、親子で活動を楽しめるような工夫を考え、さらに子どもたちの“伝えたい”思いが保護者へ広がっていくように取り組んでいきたいと思う。また、アンケートの結果について手紙を配布するなどして知らせ、園と保護者との関わりをさらに深められるような展開をしていきたい。

(かいけ心正こども園 園長 頼田知子 保育教諭 平田奈美)